



徳川後期の価格構造(2) : 物価史研究への一つの試みとして

新保, 博

(Citation)

国民経済雑誌, 121(5):19-35

(Issue Date)

1970-05

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/00171310>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00171310>



徳川後期の価格構造（2）

——物価史研究への一つの試みとして——

新 保 博

まえがき

一 課題と史料

二 一般物価水準の動向（以上前号）

三 個別商品価格の動向（以下本号）

四 相対価格の動向

五 徳川後期の価格構造の特徴

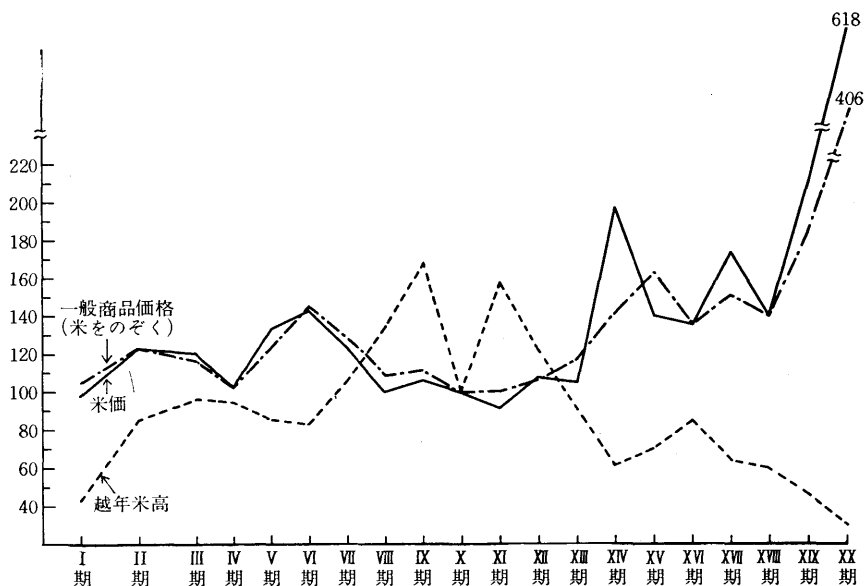
むすび

三 個別商品価格の動向

前掲の第1表から明らかに看取できるように、徳川後期を通じて個々の商品の価格は必ずしも同じような動きをしめていない。すべての商品を取り上げることができないので、享保期以来の価格数値がえられる商品のうち代表的な5種の商品（米・繰綿・木綿・種油・清酒）を選び、これらの商品を中心に徳川後期における価格の動きを検討してみよう。

A 米

米価の長期的動向を明らかにするために、第1表の銀建平均価格から金相場によって両建換算価格を算出し、その指数をグラフ化したものが第3図である。なお、第3図には米以外の商品の両建換算価格指数を平均したものの動きもしめされている。享保期に低い水準にあった米価はその後大巾に上昇し、宝暦期には享保期にくらべて20%以上の騰貴をしめているが、ふたたび下降して安



第3図 両建換算一般商品(米をのぞく)価格・両建換算米価・越年米高の動向

永初年には享保期に近い水準まで落ちている。その後天明期に米価は急上昇をみせた後急速に下落して、化政期は享保期と同じような低水準に停滞している。しかし、文政末期から天保期にかけて米価は急騰し、幕末期はジグザグな動きをくりかえしながら一般的には高い水準を維持している。

米価の動きを米以外の諸商品の平均価格の動向と対比させてみると、XII期(文政6—10)以前においては両者がまったく同じように動いており乖離はほとんどみとめられないが、XIII期(文政11—天保3)以後になると米価の動向と一般物価の趨勢との間に明らかに乖離が存在している。その乖離はとくに米価の急騰期に顕著であった。そして、米価の動きが一般物価の動きに先行している点も注目される。したがって、幕末期における物価の動向の大きな特徴として、米価がはげしく上下に動いていること、および一般物価の趨勢と米価の動向が乖離する傾向が顕著にみられることが指摘されなければならない。

ところで、米価の動きにみられる特徴の一つとして、変動の中が大きい点があげられる。第4表は各期の個別商品価格の前期に対する変動率をしめしたも

第4表 個別商品価格変動率 (%)

	米	大豆	綿 綿	種 油	清 酒	木 綿	砂 糖
II	41.6	31.1	13.6	62.2	20.7	12.9	—
III	- 2.2	- 0.7	-11.5	- 8.9	—	- 0.6	—
IV	- 9.3	- 2.2	16.1	- 7.4	—	8.0	—
V	15.0	- 5.3	24.1	8.1	0	6.8	—
VI	1.7	0.8	2.9	7.5	16.7	21.3	—
VII	- 4.9	- 3.2	-14.0	- 4.9	-13.5	7.9	13.1
VIII	- 4.2	- 3.3	- 4.5	2.9	- 7.6	19.2	-28.6
IX	4.4	-14.5	8.5	-15.0	4.1	2.6	36.2
X	- 6.1	0	-13.9	-16.0	- 3.4	- 7.3	-29.9
XI	-17.1	- 1.0	- 3.6	8.0	- 7.7	- 1.2	-27.0
XII	21.4	15.2	1.0	12.0	8.2	5.1	6.8
XIII	22.3	6.1	25.3	- 7.4	9.3	0.2	29.5
XIV	46.0	24.8	26.3	31.2	18.4	3.4	17.8
XV	-29.8	13.2	1.0	15.7	0.7	26.0	9.2
XVI	1.3	-17.5	- 4.0	- 5.3	-18.0	4.2	-13.1
XVII	25.0	22.0	0.7	9.3	27.4	5.0	5.3
XVIII	-12.1	5.2	-16.7	8.5	- 9.9	-10.5	14.3
XIX	59.0	54.2	41.8	23.0	35.3	8.8	44.9
XX	279.8	159.1	261.8	170.2	200.9	242.2	103.6

のである。一般に農産物の変動率は工産物のそれにくらべて大きく、また農産物のなかでも米の変動がもっとも大きいといえる。つぎに、変動率は一般に下降よりも上昇の場合の方が大きいことも指摘できよう。このことは、米価の低落が騰貴の場合ほど急激にはおこなわれないことを意味する。そして、米以外の商品についてもこれは程度の差こそあれ妥当する。なお、砂糖は工業生産物であるのに変動の巾が大きく、また価格下落の際の変動率も上昇の場合に劣らぬほど大きい。これは砂糖が他の商品と異なって輸入品であり、その供給量が年により大きく変化したためと思われる。以上の点に加えて、米価の変動率がXI期（文政1—5）以降ほとんど毎期10%をこえており、しかも20%以上の期が7期を数えている点に止目しなければならない。これに対してX期（文化10—14）以前は、変動率が10%をこえるのはわずか2期にすぎない。この点においても、米価の動向に文政期を画期として大きな変化が生じたというべきであろう。

最後に、米価と越年米高の関係について簡単にふれておこう。米価が米をめぐる需給関係の動きによって左右されることはいうまでもないが、大坂における米の需給関係の変化をしめす指標として越年米高をあげることができ、その増減が米価の動向に強く作用したとされている。⁸ 各期における平均越年米高は第5表のとおりであり、指数であらわしたその動向は第3図に米価の動きとともにしめされている。この図をみると、たしかにV期（天明1—6）以降越年米高の動向と米価の趨勢との間にはきわめて強い相関度がみとめられる。ところで、越年米高は商人の買請米の年末残高を意味するものであり、その増減がただちに大坂廻米高ないし大坂における米供給量の増減をしめすものとはいえない。しかも、徳川後期においては大坂の米価と他地方の米価との間の乖離はそれほど大きくないし、また大坂の米価は単に大坂における米の需給関係によってのみ決定されるのではなく、全国的な需給関係によっても左右されるところが大きいとみなければならない。そして、大坂における越年米高が全国的な需給関係を反映しているという保証も、今のところ与えられているとはいいいがたい。したがって、越年米高と米価との間の相関度が高いからといって、ただちに米供給量の相対的増加（減少）→越年米高の増加（減少）→米価の低落（高騰）という因果関係が成立するとみてよいかどうかは問題であろう。米価と越年米高との関係は、今後の検討にまっべき問題である。

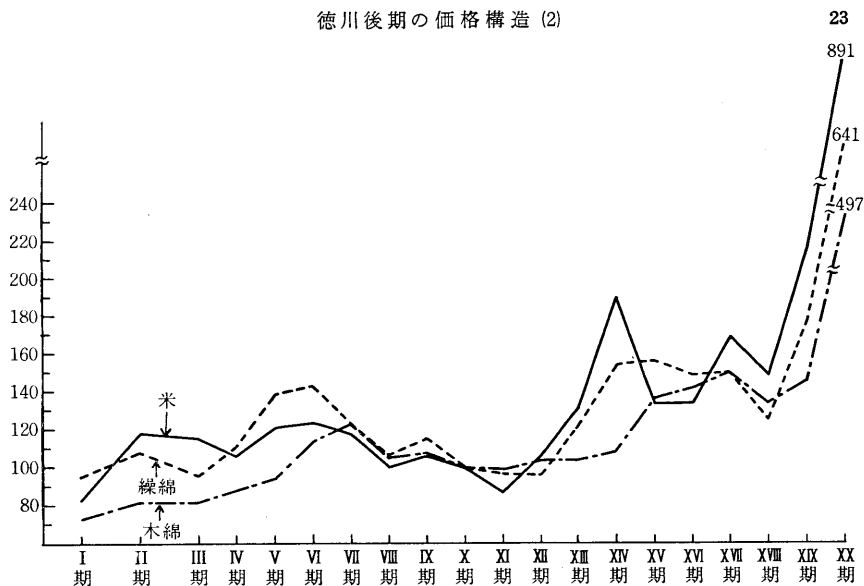
B 繰 綿

第5表 越年米高の動向

	平均越 年米高 千俵	同指数
I	723	43
II	1,440	86
III	1,625	97
IV	1,587	95
V	1,434	86
VI	1,400	84
VII	1,767	106
VIII	2,241	134
IX	2,800	168
X	1,667	100
XI	2,627	158
XII	2,039	122
XIII	1,520	91
XIV	1,025	61
XV	1,249	70
XVI	1,413	85
XVII	1,075	64
XVIII	1,000	60
XIX	766	46
XX	507	30

（注）「大阪堂島取引所沿革」
明45、85-96頁。

8 山崎，前掲論文，137-9頁。作道洋太郎「幕末維新期の価格変動と幣制」（「バンキング」222号，昭41.6）89-90頁。



第4図 米・繰綿・木綿価格の動向

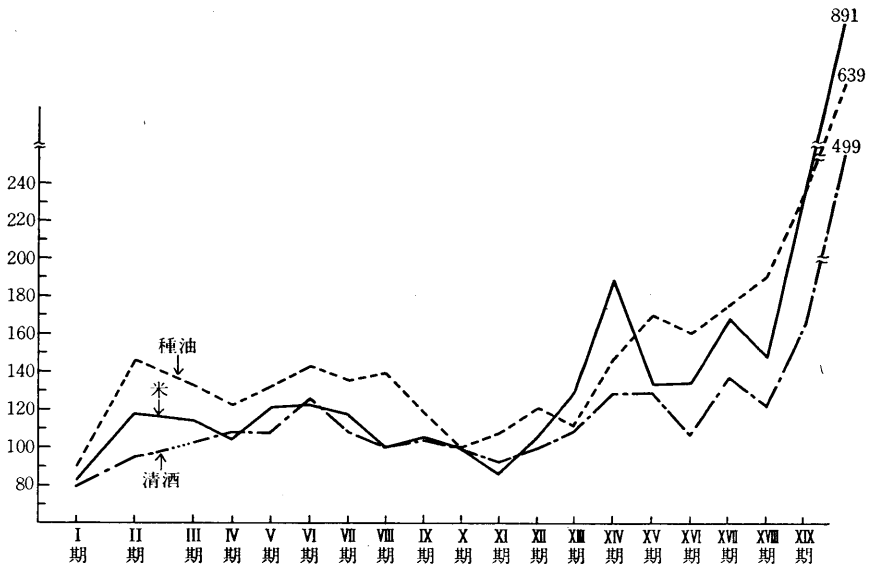
第4図は米・繰綿・木綿の価格指数の趨勢をグラフ化したものであるが、繰綿は米と同じく変動の中が大きいことがまず注目される。しかも、繰綿価格の変動の波型は米価のそれに比較的類似している。しかし、米と繰綿価格とはまったく同じように動いているわけではない。I期(享保期)からVII期(寛政5—10)にかけては繰綿価格は米価にくらべて変動の波が大きく、VIII期(享和2—文化4)とXIII期(文政11—天保3)の間は繰綿価格と米価はほぼ同じような動向をしめし、XIV期(天保4—8)以降になると米価の方が大きく変動している。徳川後期における繰綿価格の動きは天明・寛政期と天保—嘉永期という二つの大きな山をもっているが、これらの時期に繰綿価格と米価の乖離が顕著である。前の山の天明・寛政期には繰綿価格が米価にくらべて急激な上昇をみせ相対的に高い水準にあるが、後の山の天保—嘉永期の場合は繰綿価格の上昇率は米価より小さく、しかも20年ほどの間米価が波動をしめしているのに対して繰綿価格は大体同じ水準を維持している。このようにみえてみると、繰綿価格の動きも文政期を画期として大きく変化しているといえるのである。

第4図から明らかなように、木綿価格は米価や繰綿価格とはかなり異なった動きをみせている。木綿価格でも波動をみとめることができるが、その波動の巾は米や繰綿にくらべてはるかに小さい。工業生産物たる木綿の価格変動がその原料農産物である繰綿の価格変動にくらべて大きくないことは、当然のこととはいえ注目しておく必要があろう。つぎに、木綿価格が山となっている時期も米や繰綿の場合とは一致せず、時間的なずれがみられ、常に米や繰綿が木綿に先行している。われわれはすでに農業生産物価格の動きが工業生産物価格の動きに先行することを指摘したが、このことは繰綿と木綿との間にもはっきりとあらわれている。

ところで、木綿価格と繰綿価格を比較すると、上に述べたところからも明らかなように、両者が必ずしもパラレルに動いていないが、とくにⅥ期（天明7—寛政4）以前とⅩⅢ期（文政11—天保3）以後において木綿価格と繰綿価格の乖離が顕著である。その中間にあるⅦ期（寛政5—10）からⅫ期（文政6—10）にかけては木綿と繰綿はほとんど同じ動きをしめしている。この時期は物価の下降期であり、その前後の時期は物価の上昇期であったから、一般に物価の上昇期に木綿価格と繰綿価格の動きに乖離がみられ、物価の下降期には乖離がなかったとみてよいであろう。徳川後期における木綿価格と繰綿価格の趨勢にこのような特徴を生ぜしめたものとして、つぎの3点をあげることができる。(1)価格上昇の場合、繰綿価格が木綿価格に先行して動くこと。(2)価格下降期には、繰綿価格より木綿価格の方が下方硬直的であり、したがって価格低落の度合が小さいこと。(3)享保から寛政初年にかけて、繰綿価格が上下に変動しているのに反して、木綿価格は一貫した漸騰傾向をしめしていること。以上明らかにしてきた木綿価格における長期的趨勢の特徴は、決して木綿のみにかぎられるものではなく、他の工業生産物例えばつぎに検討する清酒などについてもみとめられるところであった。

D 清 酒

米と比較しながら清酒と種油の平均価格指数の動向をグラフにしめたもの



第5図 米・種油・清酒価格の動向

が第5図である。この図によると、清酒価格は享保から寛政期にいたるまで一貫して漸増傾向にあり、その後漸落傾向に転じているが、文政期から天保期にかけてふたたび騰貴傾向をしめしている。このような趨勢は木綿価格のそれとまったく異なるところはない。木綿価格と清酒価格の動きがちがってくるのは天保期以降においてである。幕末期にみられる清酒価格の上昇率は木綿価格のそれをかなり下回っており、加えて木綿の場合にはみられなかったジグザグな激しい動きをしめしている。そのため、幕末期の清酒価格は不安定であり、しかも他の商品に比較して低い水準に停滞しているのである。

清酒価格をその原料である米の価格と比較してみると、木綿と繰綿の間にみられた特徴と類似したものを見出すことができる。享保から寛政にかけての物価上昇期には、米価と清酒価格とは必ずしも平行した動きをとらず両者の間に乖離が存在するが、その後に訪れる物価の下降期においては米価と清酒価格はまったく同じように動き、そして文政期から天保期にいたる物価上昇期に原料たる農産物価格が先行して動き、ふたたび乖離が生ずるのである。このような

動きは木綿の場合と同じかたちをしめすものであるが、しかし天保以降の幕末期にいたって木綿と清酒の間には顕著な相違があらわれるにいたる。すなわち、木綿価格の場合繰綿価格に対してタイム・ラグをしめすとはいえ結局は同じ水準に達しているが、これに反して清酒価格は米価の水準を大きく下回り米価と同じ水準に達することはなかった。この点においても、徳川後期における物価の趨勢が文政期を画期として大きく変化していることが明らかである。

E 種 油

第5図をみると、種油は工業生産物でありながら、木綿や清酒のような他の工業生産物とは異なった価格動向をしめている。第1に、変動の波型が木綿や清酒の場合とはっきりちがっている。種油価格における波動のかたちは、X期（文化10—14）以前については米価の波動に近く、ジグザグに動いて、木綿・清酒のような一貫した漸増傾向をとらない。XI期（文政1—5）以後になると、米価とは異なった変動の型をしめし、他の商品の価格が多かれ少なかれジグザグな動きをとるのに対して、種油の価格には一貫した上昇傾向があらわれている。第2に、種油価格は変動の中が大きく、物価の一般的下降期にも大巾な価格低下をまねいており、さらに幕末期には米価に劣らない上昇率をもつにいたっている。このように、種油価格は木綿・清酒のような工業生産物よりも、米・繰綿のごとき農産物に類似した動向をしめしているのである。種油は工業生産物でありながら、何故農産物に近い動きをするのであろうか。木綿・清酒・種油の三者を比較すると、加工度がもっとも低いのは種油である。加工度が低い場合には生産費に占める原料費の割合は大きくなり、その工業生産物の価格は原料農産物の価格の動向に強く左右されざるをえない。したがって、加工度の高い木綿や清酒と異なり、種油価格はむしろ農産物価格に近い動き方をしたものと考えてよいであろう。

四 相対価格の動向

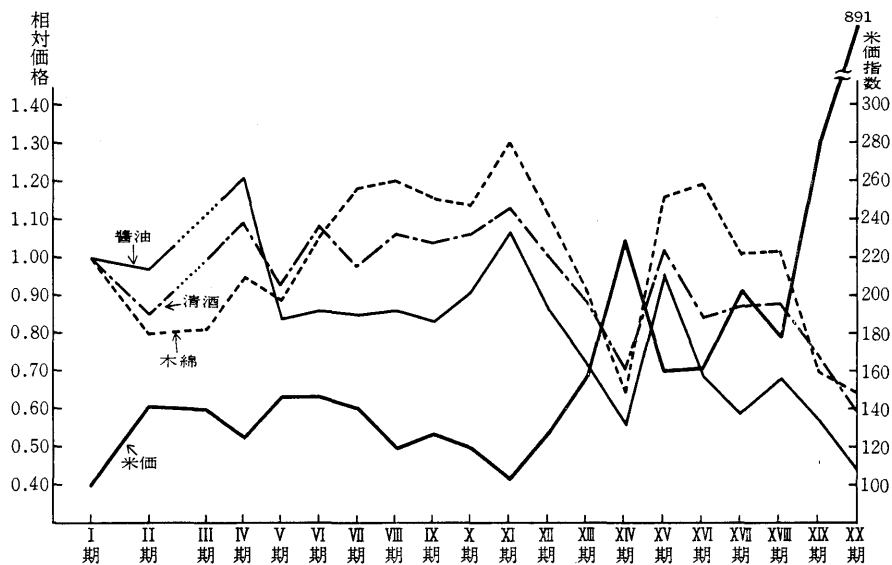
一般物価水準の長期波動と個別商品価格の長期的趨勢を検討してきたわれわ

第6表 米に対する諸商品の相対価格の動向

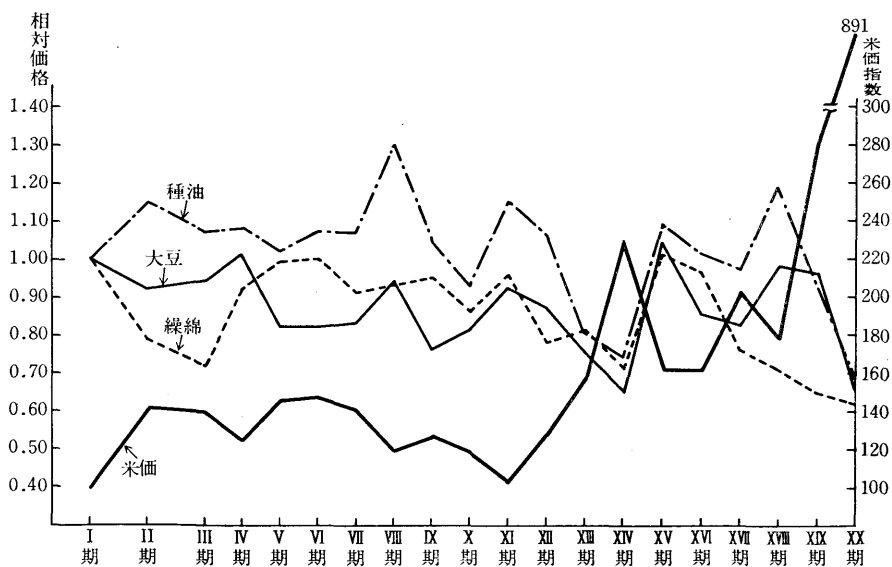
	大豆	小麦	蠟	木炭	砂糖	種油	木綿	繰綿	醤油	清酒
I	1.24					1.08	0.88	1.16	1.11	0.95
II	1.14					1.24	0.70	0.92	1.08	0.81
III	1.17					1.16	0.71	0.83	—	—
IV	1.25					1.17	0.84	1.07	1.34	1.03
V	1.02	0.95	0.85	0.75		1.10	0.78	1.15	0.93	0.89
VI	1.02	1.05	1.07	0.84	1.06	1.16	0.93	1.16	0.96	1.02
VII	1.03	1.04	0.97	0.88	1.25	1.16	1.04	1.05	0.95	0.93
VIII	1.17	1.09	—	0.92	1.05	1.40	1.06	1.07	0.96	1.00
IX	0.94	1.01	1.03	1.03	1.35	1.12	1.02	1.09	0.92	0.98
X	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00
XI	1.14	1.03	1.02	1.14	0.84	1.24	1.14	1.11	1.19	1.07
XII	1.08	0.97	0.81	1.02	0.74	1.14	0.98	0.91	0.96	0.94
XIII	0.93	1.03	1.00	0.87	0.78	0.86	0.80	0.94	0.80	0.84
XIV	0.80	0.92	0.74	0.62	0.63	0.78	0.57	0.82	0.62	0.68
XV	1.29	1.24	1.65	0.99	0.98	1.28	1.02	1.17	1.05	0.98
XVI	1.05	1.01	1.20	0.96	0.84	1.20	1.05	1.11	0.77	0.80
XVII	1.02	0.93	1.00	0.75	0.71	1.05	0.89	0.89	0.65	0.82
XVIII	1.22	1.05	1.20	0.97	0.92	1.29	0.90	0.84	0.76	0.83
XIX	1.19	1.05	1.37	0.70	0.84	1.00	0.62	0.75	0.63	0.70
XX	0.81	0.79	0.72	0.60	0.45	0.72	0.56	0.72	0.49	0.56

れは、つぎに諸商品価格間の相対的關係の長期的動向を明らかにしなければならない。まず、米に対する諸商品の相対価格について検討しよう。第6表は個別商品価格指数／米価指数比の動向をしめしたものであり、また第6図と第7図は大豆・繰綿・種油・醤油・清酒・木綿という6種商品について享保期を基準年度とする相対価格の動きをグラフ化したものである。

これらの表や図からいくつかの注目すべき特徴を見出すことができるが、その第1は相対価格の変動の中が大きいことである。物価の変動が異常に大きかったXIX・XX期をのぞくと、大豆の相対価格の最低・最高値はそれぞれ0.65と1.04であり、繰綿は0.71～1.01、種油は0.74～1.30、醤油は0.56～1.21、清酒は0.71～1.13、木綿は0.64～1.30となっている。ところで、大豆の場合に典型的にあらわれているように、相対価格と米価は線対称的な動きをしめし、米価の高騰期に各商品の相対価格はほとんど低落し、米価の低落期には逆の結果が生じている。このことは、米価と他の商品価格とが逆の方向に動いているこ



第 6 図 大豆・繰綿・種油の相対価格(米価に対する)の動向



第 7 図 醤油・清酒・繰綿の相対価格(米価に対する)の動向

とを決して意味しない。むしろ、すでに見たように、米価と他の商品価格はいくらかの時間的ずれがあるとはいえ大体において同じ方向に動いている。したがって、相対価格の変動のうちが大きいのは、米価の変動が他の商品価格の変動にくらべて非常に大きいことに起因するといわなければならない。

第2にあげるべき点は、上にとりあげた6種の商品のうち変動中の小さいのは大豆・繰綿という農産物であり、工業生産物であるその他の商品は農産物にくらべて変動巾がいちじるしく大きいことである。これは、農産物が米価に近い動きをしめすのに対して、工業生産物の場合は米価と同一方向に動いていないときもあり、また同じ方向に動いてもその変動が農産物のそれと比較して小さかったからである。すなわち、農産物価格と工業生産物価格の動向にはかなりはっきりした相違がみとめられるのである。

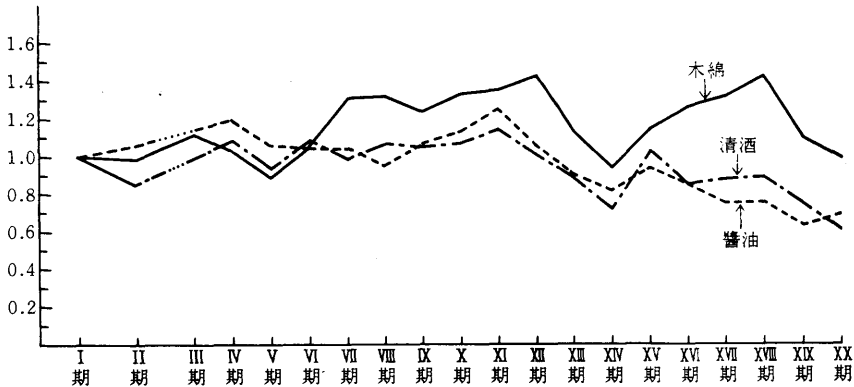
第3に、相対価格の長期的動向をみると、大体において三つの時期を画することができる。第1期はI期(享保10・11)からV期(天明1—6)まで、第2期はV期からXIV期(天保4—8)まで、第3期はXIV期以後である。農産物については第1期と第2期の間はそれほど画然としていないが、工業生産物については明確に3期に分ちうる。これらの3期はそれぞれどのような特徴もっているのであろうか。第1期と第2期とを比較すると、木綿・清酒・種油のような工業生産物の相対価格は第2期に入って高い水準を維持しているが、農産物の相対価格は第2期にむしろわずかではあるが低下傾向をしめしている。ここにも農産物価格と工業生産物価格の長期的趨勢における相違を見出しうるのである。ところが、第3期になると農産物および種油をのぞく工業生産物はともに明白な低落傾向をみせ、とくに工業生産物において顕著にあらわれている。また、この第3期に繰綿の相対価格が急激な下降をしめしている点も注目しておく必要がある。このように第3期にいたってはほとんど全ての商品が米に対する相対価格を低下させていることは、この時期における米価の騰貴率がきわめて大きく、米価が相対的に高い水準を維持していたことを意味している。この点が第3期における主要な特徴といわなければならない。

つづいて、工業生産物とその原料農産物の相対価格（交易条件）の動きを検討しよう。第7表は醤油・清酒・木綿についてその原料農産物たる大豆・小麦・米・繰綿との相対価格をしめしたものであり、第8図はその動きをグラフ化したものである。なお、醤油はほぼ等量の大豆と小麦を原料としているので、大豆と小麦の価格指数の単純平均値を醤油の原料農産物価格指数としているが、I—IV期は小麦価格についての数値を欠いているので大豆価格のみが用いられている。

第7表と第8図からわれわれが見出しうる特徴の一つは、I—V期（第1期）・V—XIV期（第2期）・XIV期以降（第3期）の3期がはっきりと区分できることである。この点は米に対する相対価格の動向について見出されたこととまさに照応している。各時期を対照させてみると、第2期は第1期にくらべて工業生産物／原料農産物価格比が相対的に高い水準に移行し、かなり長期

第7表 工業生産物／原料農産物価格比の動向

	醬 油			清 酒			木 綿		
	原料価格指数	製品価格指数	価格比	原料価格指数	製品価格指数	価格比	原料価格指数	製品価格指数	価格比
I	100	100	1.00	100	100	1.00	100	100	1.00
II	131	139	1.06	142	120	0.85	113	112	0.99
III	130	—	—	140	—	—	100	112	1.12
IV	127	153	1.20	126	137	1.09	117	120	1.03
V	116	123	1.06	146	137	0.93	145	129	0.89
VI	123	128	1.04	147	159	1.08	149	156	1.05
VII	118	122	1.04	141	138	0.98	128	168	1.31
VIII	110	104	0.95	120	127	1.06	111	145	1.31
IX	101	107	1.06	127	132	1.04	121	149	1.23
X	97	109	1.12	120	127	1.06	104	137	1.32
XI	92	113	1.23	104	118	1.13	101	136	1.35
XII	106	111	1.05	127	127	1.00	101	142	1.41
XIII	125	113	0.90	157	138	0.88	127	142	1.12
XIV	158	128	0.81	228	163	0.71	160	148	0.93
XV	163	151	0.93	161	164	1.02	163	186	1.14
XVI	134	112	0.84	162	136	0.84	155	193	1.25
XVII	159	118	0.74	202	175	0.87	156	204	1.31
XVIII	163	123	0.75	178	156	0.88	130	184	1.42
XIX	255	161	0.63	283	210	0.74	184	199	1.08
XX	696	475	0.68	1,073	632	0.59	681	668	0.98



第8図 醤油・清酒・木綿における工業生産物／原料農産物価格比の動向

にわたってその水準が維持されているが、第3期に入って工業生産物／原料農産物価格比は明白な低落傾向をしめしている。いいかえれば、物価の下降期ないし低水準期に工業生産物の相対価格は高く、物価の急激な上昇期または高水準期には工業生産物の相対価格は低くなっているのである。

つぎに、醤油・清酒・木綿の工業生産物／原料農産物価格比の長期的動向を比較してみよう。醤油と清酒はほとんど同じような動きをしめしているが、木綿は両者とはかなり違った歩みをみせており、とくに第3期においてその乖離はいちじるしいものがある。醤油・清酒の相対価格の動きの中は木綿にくらべて大きくなく、しかも第1期・第2期を通じて大きな変化をしめさず横ばい状態をつづけていたが、第3期にいたって継続的な低落が生じている。したがって、醤油・清酒の場合はきわめて単純明快な動きであったといつてよい。ところが、木綿の場合は各期の動向がきわめて特徴的であり、第2期に木綿価格が繰綿価格に対して相対的に高い水準を保っていたことと、第3期に醤油・清酒のような継続的な低下をしめさず前半の上昇と後半の下降という対照的な動向があらわれていることが注目し価値しよう。V—VII期すなわち天明・寛政期に木綿の相対価格は急速な上昇をしめしているが、これは主として木綿価格の上昇の結果であって繰綿価格の低落にもとづくものではなかった。しかし、第3期

というよりも、むしろ繰綿価格が一般物価水準に比してあまり上昇しなかった結果である。このことは米に対する相対価格をしめした前掲第 6 図をみれば瞭然となるであろう。第 3 期に木綿価格／繰綿価格比の上昇がみられたとはいえ、一般的にみれば木綿の相対価格は第 2 期にくらべて低い水準にあり、この点では他の工業生産物の場合と何ら異なるところはなかった。だが、当時のもっとも主要な工業生産物である木綿の原料農産物に対する価格比が、第 2 期と第 3 期についてきわめて特徴的な動きをしめしていることは、徳川後期の経済発展を理解する場合見逃すことのできない重要な事柄であると思われる。

五 徳川後期の価格構造の特徴

最後に、これまで検討してきたところを総括しつつ、徳川後期における価格構造の特徴を明らかにしておこう。

享保期から慶応末年にいたる徳川後期の物価の長期的動向を観察すると、まず循環的変動すなわち長期波動を明らかにみとめることができる。まず、享保期に低い水準にあった物価は宝暦から寛政にかけて上昇期ないし高水準期をむかえ、それについて享和・文化・文政の物価下降期または低水準期があらわれ、そして天保期以降ふたたび物価上昇期ないし高水準期が訪れている。徳川後期における一般的物価水準の変動は、改鋳その他の貨幣的要因に直接結びつけて理解すべきものではなく、需給要因の長期的変化によって生じた長期波動として捉えられる。化政期における一般物価水準の沈滞から天保初期の物価急騰を経て幕末期には物価の高水準が続いているが、このことはこの時期に需給要因に大きな変化が生じていたことを意味する。そして、幕末における一般物価の高水準からそのまま明治期に接続していったことは、幕末期から明治期にかけての日本の経済発展を考察する場合、きわめて重要な事実であるといわなければならない。物価が下降ないし沈滞している時期ではなく、物価が上昇または高水準にありしがつて経済の沈滞していない段階に開港をむかえたことは、先進資本主義からの衝撃に対する日本の対応にとってきわめて重要な意味をも

っていたと思われるのである。

一般物価水準にみられる循環的変動は、米をはじめ主要な個別商品の価格についても同じようにあらわれている。しかしながら、すべての個別商品価格がまったく同じ動きをしめしているわけではない。農業生産物と工業生産物とを比較すると、農業生産物のほうが価格変動の巾が大きく、工業生産物は農業生産物にくらべて下方硬直的で物価下降期における値下りの度合いが小さい。農業生産物のなかでは米価の変動がもっとも大きく、また工業生産物においては加工度の小さなものほど変動率が高い。さらに、農業生産物は工業生産物に先行して上昇する傾向が強い。その結果、工業生産物／農業生産物価格比も、物価水準の変動に応じて変化することになったのである。工業生産物／農業生産物価格比が大きな変動をしめすのは物価が上昇に転じた時期であるが、これは農業生産物価格の上昇と工業生産物の上昇との間に時間的ずれがあったことに起因する短期的変動であった。工業生産物／農業生産物価格比の長期的動向をみると、一般物価水準の循環的変動との間に明白な対応関係が存在している。物価の上昇期・高水準期には工業生産物／農業生産物価格比は小さく、工業生産物価格は農業生産物価格に対して低い水準にあった。しかし、物価の下降期・低水準期においては、逆に工業生産物／農業生産物価格比が大きく、工業生産物価格は農業生産物価格にくらべて相対的に高い水準を保っている。一般に資本主義経済の下では、物価の上昇期・経済の上向局面においては工業生産物／農業生産物価格比が下降し、物価の下降期・経済の下向局面においては工業生産物／農業生産物価格比が上昇するが、徳川後期においても同じような傾向をわれわれは明らかにみとめることができるのである。

徳川後期における物価の上昇期・高水準期は宝暦一寛政期と天保以降の幕末期であるが、この二つの時期における物価はまったく同じ構造をしめしていたわけではなく、天保以降における価格の動向にはそれまでにみられなかったいくつかの重要な特徴があらわれている。そして、天保期に物価急騰が生じその後高水準を維持したまま、開港を経て明治期の近代的経済発展へと接続してい

く。したがって、天保期以降の価格構造は近代的経済発展に対する先行条件として重要な意味をもっている。そこで、化政の物価沈滞期から天保の物価急騰期にかけての物価動向に焦点をしばってみよう。

天明・寛政期に高い水準にあった物価は、享和以降ならかな下降局面にはいり、化政期を通じてかなり長期にわたり低い水準に停滞した。この時期には、すでに指摘したように、原料農産物の価格は工業生産物よりも大巾な下落をしめし、商業的農業は大きな打撃をうけることになった。綿・菜種を中心に国訴が頻発したのが文政期であったことは、この点から理解されねばならない。天保期にはいと米価の急騰を先導にして物価は大巾な上昇をしめすことになるが、天保初期に継続的におこった不作が米価の暴騰をまねいたことは改めて指摘するまでもない。しかし、米価の暴騰が物価水準の急騰を先導することによってその契機となったことは否定できないとしても、それは一時的なものであり、この時期における一般的な物価水準の上昇傾向を説明するものとはなりえない。未だ低い水準にあったとはいえ、物価水準はすでにⅫ期（文政6—10）から騰勢に転じており、天保期における物価の上昇はその延長線上でとらえることが必要である。それならば、幕末における物価の上昇傾向と高水準は何によって説明できるであろうか。

天保期においては農産物価格が工業生産物価格に先行して上昇しており、農産物のなかでも米価の変動の巾は大きく、物価水準の動きに対して主導的役割をはたしていた。したがって、農産物とくに米に対する需給関係に大きな変化が生じつつあると考えてよいであろう。享保以降停滞ないし微減傾向にあった人口は、文化期をさかいにして増加傾向に転じている。これは、米をはじめ食糧に対する需要の増加をもたらさざるをえない。加えて、このころから諸藩は国産専売制を通じて国産奨励をはかるなど積極政策をとっており、また藩札などの形態による信用の拡大がみられたことも、幕末期における物価の上昇傾向・高水準に大きく寄与している。ところで、幕末期の価格構造の重要な特徴の

9 関山直太郎「近世日本の人口構造」昭33, 141頁。

一つである工業生産物／農産物価格比の低下傾向は、農産物価格の大巾な上昇によってもたらされたものであるとはいえ、工業生産力の発展によって支えられねばならず、それは地方における工業的發展や社会的分業の進展によって可能であったとみてよいであろう。そして、文政期ごろからとくに天保期以降地方商人の擡頭・藩専売制の展開を通じて全国の商品流通に大きな変化が生じ、大坂問屋商人を中心とする全国的市場機構が動揺するにいたったことも、まさにこの時期における需給要因の変化と密接な関連をもつものであった。このように徳川時代における経済發展はほぼ文政期を画期として新しい段階にはいったのであり、この結果物価が上昇に転じ新しい価格構造をしめすようになったと考えられるのである。しかし、開港による世界経済との接触は、需給要因に大きな変動をもたらし、価格構造に根本的な変化を与えつつ、明治期をむかえることになったのである。

む す び

われわれは、きわめて限られた物価史料を用いてではあるが、徳川後期における価格構造についての検討をこころみてきた。本稿でこころみたことは、享保期以降慶応末年にいたる物価の動向についてファクト・ファインディングをおこなうことであり、そのかぎりでは重要ないくつかの問題点を見出すことができた。しかし、それらについての十分な解明は未だおこなわれておらず、また徳川後期とくに幕末期の価格構造についてえられた見とおしもまったく暫定的なものにすぎない。われわれの今後の課題は、より包括的な時系列物価史料の蒐集・整理につとめるとともに、ここで明らかにされた問題点について本格的検討をおこなうことである。それに加えて、本稿でとり上げることのできなかった第三の課題、すなわち物価の地域差・地域的構造の問題も次稿の射程距離内におさめられなければならない。

(完)